

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「人間は自然の中で一番弱い一本の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である」——よく知られたパスカルの言葉である。

ところで、なぜ「葦」なのだろうか。葦の代わりにバラとかサボテンとかを置き換えることはできるだろうか。パスカルの文脈からいえば、形式上はできなくはないように思える。「人間は考えるサボテンである」と。しかし、何となくちぐはぐな感じが残るであろう。なぜだろうか。パスカルが「葦」に比喻を求めたのは思いつきではなくて、何か理由があったのではないだろうか。

ときどきいわれるのは、彼が新約聖書の次の言葉を念頭においたという解釈である。すなわち、イエスが群衆に向かつて、「汝らは何を見ようとして野に出てきたのか。風に揺らぐ葦であるのか」と。イエスは、群衆がバプテスマのヨハネを知らずに、ただ風に揺らぐ葦を見ていることをたしなめている。ここでいわれる葦は、野に生えているとるに足らぬもの、という意味である。①そういう葦にくらべて、バプテスマのヨハネは、「女の産んだ者の中で彼より大きい人物は出てこなかった」とされる人物である。そういうヨハネは、風にそよぐ葦にくらべると、何と大きな存在であることか。しかしイエスは、「天国で最も小さい者も彼よりは大きい」とつけ加えた。そうだとすると、逆にとるに足らない存在ということになる。そういうつまらない存在としての葦でさえ、もし②それが「考える葦」となるなら、それは宇宙よりも高貴である、とパスカルは言ったのだろうか。

パスカル自身は「自然の中で一番弱い葦」という言い方をしている。しかし、葦は本当に弱い植物だろうか。ここに疑問ないしヒントがある。実際の葦はそんなに弱くはないのである。それは水辺に群生し、二メートルの高さに達し、強い繁殖力をもっているのである。

もう一度パスカルの言葉を見てみよう。フランス語の原文では、パスカルの言う「葦」には単数形の不定冠詞がついている。この不定冠詞をあえて訳してみるとどうなるだろうか。そうすると、「人間は一本の考える葦である」となる。群生する葦ではなくて、一本の葦——こうなると少し事情が変わってくる。なぜなら、群生の場をはなれて一本だけで立つということは、まさに自然のうちで一番弱い存在になることだからである。人間でも、社会から疎外されたときほど弱い者はない。

では、そういう弱い一本の葦と「考える」ということは、どう結びつくのだろうか。私には、「A」が考えるのではなくて、「B」がそれぞれ一本の葦になる、というふうに思われる。どちらも似たような表現であるが、意味は違う。一体、人が何かを考えると、彼はどういう状態にあるだろうか。考えるということは、どこまでも自分一人にもどって、自分の内面で考えるということである。共同でディスカッションをしているときも、人から教えられて考えるときも、考えるという作業そのものは、自分で考える作業であり、自分一人になるという面をもっている。

考えるということは、一方で群生することを必要とする人間が、自分の内面にもどって、死すべき者としての絶対の有限性に直面することである。しかし他方でこの内面は、他の人間と共有する最も基本的で深い根にとどく。一本の葦は枝葉によって他と交わるときは、本当は交わっていないのである。むしろ孤独な一本の存在にもどることによって、一本の葦はかえってその根もとで他との共同存在の根ないし根拠を獲得する。そういう根拠として、人間の思惟は人間の存在の本質をなすともいえる。

パスカルは、人間が「自然の中で一番弱い一本の葦」ではあってもそれは「考える葦」として、自分をおしつぶさんとする宇宙全体よりも高貴であると言う。そしてその理由として、「人間が死ぬことを知っている」という点を挙げた。宇宙は、その生成変化によって、一本の葦どころか、大陸や海岸や星そのものの存在をさえおしつぶすこともある。ただし宇宙は③それを知らない。人間だけがそのことを知り、且つ考える。「C」ということについて人間が自覚するということは、人間がただ一人という存在にもどることであり、同時にこの自覚を通して、他の死すべき存在と結びつくところである。そこから宗教や社会や歴史がはじまる。それが、パスカルの言う「思惟」あるいは考えるということの有り方に含まれる。その有り方をパスカルはこうも言っている。「宇宙は空間によって私を包み、一つの点としての私を呑み込む。しかし思惟によって、宇宙は私を包む」。

※バプテスマ：洗礼者、洗礼を施す者の意。

問一 傍線部①「そういう」の内容を、本文の言葉を用いて簡潔に答えなさい。

問二 傍線部②「それ」の指示内容を十字以上十三字以内で答えなさい。

問三 傍線部③「それ」の指示内容を、本文の言葉を用いて答えなさい。

問四 本文中に主語と目的語とが逆転しているため、文意の通らないところがある。正しい主語と目的語を答えなさい。

問五 波線部はどう変わるといえるのか。次の中から正しいものを選んで、記号で答えなさい。

ア 群生する葦は強いのに、弱さが強調されるようになる。

イ 葦の自然な存在よりも、むしろ孤独が強調される。

ウ イエスの用いた比喻の意味から社会的存在への意味が変わる。

エ 思惟の比喻から疎外の比喻へ変わってくる。

問六 

A
---

 (四字)、

B
---

 (四字)、

C
---

 (二字) に入るべき適当な語句を本文中から選び、それぞれ指定の字数で答えなさい。

問七 「人間が考える」という問題について本文の論旨と合致しないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 考えるとは体験することである。

イ 考えるということは内面的な孤立化に甘んじることでもある。

ウ 考えるとは、自分の内面に向かって死すべきものとして自覚することである。

エ 考えるとは、共同の存在として他の存在と向き合うことである。

二 次の傍線部のカタカナを漢字に漢字をひらがなに直しなさい。

① キリサメが降る

② 身柄をコウソクする

③ 生活のギバン

④ チンモクを破る

⑤ シヨカツの警察署

⑥ ロウト状の花

⑦ ケンジツな生き方

⑧ 言論をダンアツする

⑨ 販売をイタクする

⑩ 船がザシヨウする

⑪ 敵をテイサツする

⑫ 使用ヒンドが高い

⑬ 狭小の庭

⑭ 純朴な人

⑮ 注意喚起する

⑯ 白髪の老翁

⑰ 廉価で販売